＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

AA 研共同利用・共同研究課題「死の人類学再考：変容する現実の人類学的手法による探究」2023 年度第 2 回（通算第 10 回）研究会

日時：2023 年 12 月 2 日（土）AA 研 306 号室
13:30～15:30
金セッピョル（AA 研共同研究員、総合地球環境学研究所）「死を通して生に向かう――喪輿(サンヨ)・喪輿小屋の軌跡から」
15:45～18:00
西井凉子（AA 研所員）「死の人類学」論集草稿準備にむけての議論

【要旨】

「死を通して生に向かう――喪輿(サンヨ)・喪輿小屋の痕跡から」

金セッピョル

韓国の葬儀において、葬列はこの世からあの世への移行を意味する重要な儀式であった。なかでも遺体を乗せる喪輿(サンヨ)は、葬列の中で中心的な存在であったと考えられる。ところが、土葬から火葬への移行や葬儀の場所の変化などを背景に、現在はほとんど姿を消している。

それが近年、輿に関して注目すべき動きがみられる。喪輿、喪輿を保管する小屋を保存しようとする運動がそれであり、「ナラオル研究所」という団体が主体になっている。彼らは喪輿や喪輿を保管する小屋を有形文化財に、かつての葬儀習俗を無形文化財に指定するための活動を展開している。

その狙いは、第一は韓国の伝統文化保全である（実際に喪輿を使うことを主な目的としてはいない）。喪輿と喪輿小屋は、かつては「我が民族の死をめぐる美しき伝統」として存在していたが、植民地経験や戦争、独裁政権による急な経済成長など、近現代の歴史を経るなかで、その存続が危うくなったと認識されている。そこで保存すべき文化財として、喪輿が再発見されることになる。

喪輿保存運動のもう一つの狙いは、現代の死の文化を再考することにある。実際に多くの死者に使われていた喪輿、喪輿小屋と接し、関わることで、死について考え、死者を丁寧に見送る文化の回復を狙う。

この後者の狙いに注目してみると、喪輿保存運動を突き動かしている原動力の中心には「死そのもの」があることがわかる。本報告では、喪輿保存運動が進んできた軌跡を辿り、それに携わっている人々が、死と関連して、どのようにアフェクトされ・アフェクトしなが

ら運動を進めてきているかについて論じた。運動に携わっている人々は、喪輿や喪輿小屋が想起させる「死そのもの」に影響されながら、自分でも論理的に説明できないほど運動に巻き込まれていく。

お墓は特定の「誰か」が埋まっているため、主に「誰かの死」を連想させる。それに対して「喪輿小屋」は、不特定多数の死者が利用してきた痕跡が刻まれているため、「誰かの死」、「自分の死」を含みながらも、それを超えた「死そのもの」に思索を拡張させる。この「死そのもの」が、運動に携わっている人々に様々な波動をもたらしていることを、いくつかの事例を通して論じた。また、運動の構成員たちの間では「死そのもの」という、「私たち」に共通した根源的な部分を共に見つめている間柄という独特な連帯感が生まれていることも、合わせて報告した。

「『死の人類学』論集草稿準備にむけての議論のために」

西井涼子

死は、生きている人は自らだれも体験したことがない出来事である。一方、誰しも他者の死は経験している。それが、近しい人であろうと、テレビのニュースや新聞記事でしか接点のない人であろうと、すでに不在となった人との関係をもちつつ「今ここ」に生きているといえよう。よって、死に接近するために、われわれが生きている世界の解明をめざす人類学にできることは、自らが生きている現在性のうちに、死者がいかにわれわれの生きる世界のなかで「生きて」いるのかを明らかにすることだけである。本論集では、外部を受け入れる運動としての情動（アフェクト）を呼び込み、目に見え体験されるものの水面下での異質で複雑な内在的な力＝アフェクトの流れとしての生の潜在性に通じる郡司ペギオ幸夫のいう「1・5 人称」的構えにより「死の人類学」に接近する。それは、偶然の、一期一会の出会いとして、死者を受け入れる態度であり、そこにはそれぞれの死者との個別の経験がある。本論集では自らが生きている現在性のうちに、死者がいかにわれわれの生きる世界のなかで「生きて」いるのかを示すことを企図する。

序章（もしくは終章）では、以下のような項目にそって議論を展開する予定である。

１　はじめに

２　アフェクト論的視野から

　１）個と集合性

　２）フィールドワークと身体

３　死のマテリアリティ

　１）生命のあるマテリアリティ

　２）死体のマテリアリティ

　３）死者のマテリアリティ

４　死と時間性

１）クリティカルな瞬間

２）死者と記憶

５　結論にかえてー生きる世界における死者

１）1.5 人称の視点

２）死者との共在　　以上。